

軍事史学

第45巻 第3号

巻頭言

二つの『日中戦争』

二つの『日中戦争』とは、ほかでもない、白井勝美氏が書かれた二つの中公新書のことである。最初に書かれたもの（便宜上、旧版と呼ぼう）が一九六七年の刊行、「新版」と銘打たれたものは二〇〇〇年に刊行された。旧版は盧溝橋事件の三〇年後に上梓され、新版はそれからほぼ同じ時間を経て世に問われた。今回、あらためて読み比べてみて、二つの版の間に重複している叙述がほとんどないということを確認した。つまり、新版とは言いながら、これは旧版とは全く異なる書物なのである。ただし、重複している叙述がほとんどないとはしても、日中戦争史としての歴史解釈、その底を流れる歴史観には、基本的に変化は見られない。その意味で、「新版」であることに間違いはない。むろん、部分的解釈には違いもある。特に注目されるのは、新版での広田弘毅や重光葵に対する厳しい評価である。新しい史料の発掘・公開によって重光や広田については再評価が進んだが、白井氏は逆に彼らの責任の重さに関する確信を強めたかのように見える。また、日中戦争「前史」の部分の比重が大きくなっていくのも新版の特徴の一つである。さらに、旧版刊行後に世に出た新史料や新研究を広く参照し、特に中国の研究の良質の部分を丹念に取り込んでいる。白井氏は旧版刊行後も同じテーマに取り組み続け、同じテーマで新著を世に問うた。歴史研究に「完成」はない、ということとを、それとなく示されたのだろうか。それは、歴史を研究する者としてのあるべき姿勢と言うことができよう。ところで、なぜ白井氏は新版を旧版と同じ書名にしたのだろう。むろん新版がこの研究分野で第一に推奨されるべき基本的文献であることは言うまでもない。だが、旧版も捨て難いのである。余計な心配かもしれないが、新版が出たことによって、旧版が読まれなくなることはないよう望みたい。

（戸部良一）